



別巻 1

ミ ッ チ ェ ル

風と共に去りぬ

I

大久保康雄 竹内道之助 訳

河 出 書 房 新 社

世界文学全集 別巻Ⅰ ミッチェル



© 1960

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

(本書は日本における翻訳出版権所有者三笠書房の厚意により刊行)

昭和 35 年 3 月 10 日印刷

昭和 35 年 3 月 15 日発行

定 価 290円

訳 者 大久保康雄
竹内道之助
発行者 河出孝雄
印刷者 中内佐光
装 幀 原 弘

印刷：暁印刷株式会社
製 本：株式会社小高製本所
本文用紙：日本製紙株式会社
同 納 入：株式会社大和屋洋紙店
クローズ：日本クロス工業株式会社
同 納 入：株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の八

電話 東京(291)3721~7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

風と共に去りぬ I

第一部

第一章	三
第二章	七
第三章	一〇
第四章	一六

第五章	一九
第六章	二六
第七章	三〇

第二部

第八章	一八
第九章	二〇
第十章	二五
第十一章	二九
第十二章	三三

第十三章	三七
第十四章	三七
第十五章	三九
第十六章	四〇

第三部

第十七章	三七	第十九章	四三
第十八章	四二	第二十章	四三

解 説……………（大久保康雄）

一 ミツチエル女史について……………	四五
二 『風と共に去りぬ』が世に出るまで……………	四六
三 歴史小説としての『風と共に去りぬ』……………	四六
四 この小説の背景としての南北戦争……………	四三

風と共に去りぬ

I

主要人物

スカーレット・オハラ 本編の女主人公。タラの大農場主ジェラルドの長女。魅惑的な美貌と火のような激しい気性の持ち主。アシュレに失恋し、チャールズと結婚する。

ジェラルド オハラ家の主人。アイルランド生まれの豪農。

エレン ジェラルドの妻、スカーレットの母。

スエレン スカーレットの次の妹。

キャリーン スカーレットの二番目の妹。

チャールズ・ハミルトン ハミルトン家の長男。スカーレットの第一の夫となる。

アシュレ・ウィルクス ウィルクス家の長男。教養ある貴族的な青年。スカーレットの熱烈な求愛をこばんで、いとこのメラニーと結婚する。

メラニー アシュレの貞淑な妻。献身的で、寛容な精神の持ち主。チャールズの妹。

インディア アシュレの妹、オールドミスで、スカーレットを憎む。

フランク・ケネディ アトランタの材木商。スエレンの許婚。

レット・バトラー 市民からは無頼漢として毛ざらいされているが、戦争を背景に巨万の富をきずいた大胆不敵な風雲児。

ベル・ワットリング アトランタの闇の女。レットのなじみ。

ピティパット チャールズやメラニーの叔母。オールドミス。

マミー エレンが実家から連れてきた黒人の侍女。

第一部

第一章

スカールレット・オハラは美人ではなかったが、ふたごのタールトン兄弟がそうだったように、ひとたび彼女の魅力にとらえられてしまうと、そんなことに気のつくものは、ほとんどないくらいだった。その顔には、フランス系の「コースト（海岸）」貴族の出である母親のデリケートな目鼻だちと、アイルランド人である父親のあから顔の粗野な線とが、めだちすぎるほど入りまじっていた。しかし、さきのとがった、角ばったあごなど、妙に人をひきつける顔である。目は、茶のすこしもまじらない淡碧で、こわくて黒いまつ毛が、星のようにそのまわりをふちどり、それが目じりへきて心もちそりかえっている。その上に、黒くて濃い眉が、ややつりあがりぎみに、もくれんのような白い肌に、あざやかな斜線をひい

ていた。——この肌は、南部の女たちがひどく大切にしておいて、ボンネットやヴェールや手ぶくろなどで、あのジョージアの激しい日ざしから、じつに注意ぶかく守っているものなのである。

一八六一年四月の、ある輝かしい午後、父の大農場タラのポーチの涼しい陰に、タールトン家のふたご兄弟スチュアートとブレントとともに腰をおろしている彼女のすがたは、一幅の絵のように美しかった。スカートのフープ（フープ）の上に十二ヤードも波うっている緑の地に花模様の新しきモスリンのドレスは、最近父がアトランタから買ってきてくれた緑色のモロッコ皮の上靴に、よく調和していた。ドレスは、このかいわい三郡きつての細い腰、十七インチの腰の美しさを、くっきりと浮きたたせ、びつちりと身についたバスケット（上着）は、十六歳にしてはよく成熟した胸のふくらみを見せていた。しかし、内気そうにひろげたスカートも、シニヨン（まげ）に結ってネットをかけたしとやかな髪も、ひざの上につつましくかさねている小さな白い手も、彼女のほんとうの人柄はとうていかくしきれぬものではなかった。気をつけてやさしく見せている顔のなかで、碧色の目だけは、あらあらしく強靱な意志と、あふれるような情熱と

をあらわして、その上品な物腰とは、およそ似つかわしくないものがあつた。彼女の挙措は、母のやさしいつけと、黒人の乳母の、よりきびしい訓育とによっていられたものであつた。だが、目だけは彼女自身のものであつた。

彼女の両側には、ひざまでの長靴をはいたふたごの兄弟が、のんびりといすにもたれて、鞍ぶりのした長い両足をむぞうきに組みかさね、笑ったり話したりしながら、はつか水の高いコップごしにきらめく日の光に、目を細めていた。ふたりとも年齢は十九歳、丈は六フィート二インチ、骨組み高く、筋肉たくましく、日にやけた顔、濃い赤褐色の髪、明るい傲慢な目、同じ青い上着、同じからし色の乗馬ズボンにからだをつつんで、この兄弟は、まるで二つの綿のさやのようによく似ていた。

戸外では、おそい午後の陽光が、ななめに前庭に射し、新緑を背景にして、まっ白な花のかたまりのようなみずきの茂みを、まばゆく浮きださせていた。兄弟の乗馬は、馬車道のほうにつないであつたが、大きな馬で、主人の髪の毛とおなじ赤い毛なみをしていた。馬の足もとでは、兄弟の行くところへなら、どこへでもついてくる、やせて神経質な、ポッサム（袋鼠）狩りに使用する

猟犬の一群が、しきりとけんかをしてた。すこし離れたところには、口輪をはめ、いかにも貴族然とした顔つきの黒ぶちの馬車犬が一匹、主人たちが晩の食事にかえるのを、辛抱よく待っていた。

これらの犬と馬と兄弟との間には、いつもいっしょにいろという以上の深いつながりがあつた。いづれも、健康で、思慮のない若い動物たちで、育ちがよくて、優美で、癩癧がつよく、青年たちは彼らの乗馬と同じように、血気さかんで、癩癧もちで危険ではあるが、うまくあやつてくれる人にたいしては、すこぶるやさしい感情をもっていた。

安楽な大農園主の生活のなかに生まれ、幼時から、なに不自由なく育てられてきたのだが、このボーチにならんだ三つの顔には、けっして無気力な弱々しいものはない。一生を、ひろびろとした外気のなかですこし、読書などという退屈なことには、あまり頭をなやましたことのない、自然人の、はちぎれるような鋭気と精悍さをもっていた。ジョージア州の北部にある、ここクレイトン郡の生活は、まだ新しく、すでに根のはえた、オーガスタやサヴァナやチャールストンなどにくらべると、ずっと野性的であつた。だから、南部でも、もっとおちつ

いた、古くから開けている地方の人々は、奥地のジョーシア人たちをさげすんでいたが、北部ジョーシアのこのあたりでは、昔ふうの典雅な教養が欠けていても、日常生活に必要なことさえうまく処理していければ、いっこう恥ではなかった。よい綿花をつくること、乗馬が巧みなこと、射撃がじょうずなこと、軽やかに踊ること、やさしく婦人に奉仕し、一人前に酒がのめて酒席の相手がつとまること、彼らに必要なのは、これだけだった。

ふたりとも、こんな方面の才能にかけては、なかなかすぐれていた。書物にふくまれている内容から何かを学びとる才能に欠けている点においても、同じように彼らには有名だった。彼らの家はこの郡内でも肩をならべるものはないほど財力があり、馬や奴隸も一ばん数多くもっていたが、このむすこたちは、こと学問に関しては、近所に住んでいる貧乏白人の大部分よりも、劣っていた。

スチュアートとブレントが、この四月の午後、タラ屋敷のボーチでのらくらしている理由も、まさしくここにあった。その日もちょうど彼らは、ジョーシア大学から——この二年間に彼らを退学させた四番目の大学から、放校されてきたばかりなのである。彼らの兄のトムとボイドも、弟たちを歓迎しないような学校には、いてやら

ないというので、みないっしょに帰ってきてしまった。スチュアートもブレントも、こんどの放校処分を非常におもしろがっていた。またスカレットも、去年ファイエットヴィル女学校を卒業して以来、これも自分からは一冊の書物もひもといたことがないほどだから、彼らと同様に、これをおもしろがっていた。

「あなたたちふたりやトムは、放校なんて、なんとも思っていないでしょうけど」と彼女は言った。「でも、ボイドはどうかしら。あの人は、きちんと学校をやりがっているんでしょう。それなのに、あなたたちふたりして、ヴァージニア大学、アラバマ大学、南カロライナ大学、そしてこんどはジョーシア大学と、どこもみんなやめさせてしまつて、こんなふうだと、いつになってもあの人、卒業できないことよ」

「なあに、あいつは、ファイエットヴィルのパーマリイ判事さんの事務所で、法律の勉強をするからいいんだよ。こんなことは、たいして問題ではないんだ。それに、こんどのがなくなつたつて、どっちみちぼくたちは学期が終わらないうちに帰つてこなければならなかつたんだからね」と、ブレントが、こともなげにいい放った。

「あら、どうして？」

「戦争だよ、ばかだなあ！　いつ戦争がおっばじまるかわからないんだよ。きみは、戦争がはじまるというのに、ぼくらが学校にじっとしていられると思うのかい」

「戦争なんてありはしないわよ」とスカーレットは、そんな話題はもううんざりといった調子で言った。「ただうわさだけよ。なぜって、先週、アシユレ・ウィルクスさん父子がきて、うちのお父さんに話してたわ、ワシントンに派遣された南部の委員たちが、南部諸州同盟のことについて、リンカーン氏と、友好——なんていったかしら、そうそう、友好協定よ、その友好協定ってものを、まとめたって。どっちにしてもヤンキー（北部人）は、戦争する気がないほど南部をこわがっているのよ。だから戦争なんてありはしないわ。あたし、もう戦争の話なんかあきあきしちゃった」

「戦争がないって？」ふたごは、自分たちがだまされたかのように、いきりたって叫んだ。

「もちろん戦争になるよ。そりヤンキーはわれわれを恐れているかもしれない。しかし、とにかく一昨日、ポールガール將軍が、サムター要塞を攻撃して、やつらを追い払ってしまったんだ！　こうなった以上は、やつらにしても、戦争せざるをえないさ。さもないければ彼らは、

世界じゅうに臆病者の名をさらすことになるもの。南部同盟は——」

と、スチュアートがいうと、スカーレットは、もうがまんができないというように、口をとがらせた。

「もう一度戦争という言葉を口にしたら、あたし、家のなかにはいつてドアをしめちゃうことよ。生まれてからこのかた『戦争』という言葉ほど、あたしをあきあきさせたものはないわ。それに、もう一つは『南北分離』という言葉——。うちのお父さんときたら、朝も昼も晩も戦争の話、それから訪ねてくる人が、またきまってサムター要塞だの、州権の独立だの、リンカーンだのと、そんな話ばかり。まったくあたし悲鳴をあげたくなるわ。しかも、若い人たちまでが、やっぱりそれで、やれ戦争とか、これから編成される騎兵隊のこととか、そんな話ばかりなんですよ。今年の春のパーティが、ちっともおもしろくなかったのは、男の人たちが、戦争のこと以外、話題がなかったからよ。このジョージア州が、去年のクリスマスがすむまで北部から分離するのを延期してくれたので、どんなにありがたかったかしれないわ。だってさもないと、せっかくのクリスマスのパーティが、めちゃくちゃになってしまったにちがいないんですよ。」

あんなたち、もう一度戦争と言ったら、あたし、ほんとに家へはいっちゃうことよ」

彼女にとっては、それはそのとおりであった。彼女は、自分を中心にならない話題には、ながく辛抱することができなかった。だが、彼女は、そんなことをいうときにも、意識的にえくぼをふかめ、黒いまつ毛を蝶の羽のようにかろやかにまたたき、ほおえんで見せるのを忘れなかった。だから青年たちは、彼女の予期したとおりに魅惑され、あわてて彼女を退屈させたことをあやまるのであった。戦争に興味をもていないからといって、彼らがスカーレットを思うことに変わりはなかった。かえって彼女への思いを深めた。戦争は男の仕事で、淑女のかわり知るべきことではない。だから彼らは、彼女の態度を、かえって女らしさを示すものだと考えるのである。

退屈な戦争の話をやめさせた彼女は、こんどは、おもしろそうに、話題を当面のことにもどした。

「お母さまは、あんなたちふたりが、また放校になったのを、なんとおっしゃって？」

ふたりは、ぐあいのわるそうな顔をした。三か月前、ヴァージニア大学から論旨退学になって帰ってきたとき

の母親の態度を思いだしたからである。

「それがね」とスチュアートが言った。「母はまだぼくたちに叱言をいう機会がないんだよ。トムとぼくたちふたりは、今朝、母がまだ起きないうちに家を出て、トムはフォントーン家へ行ってちこまっているし、ぼくたちはここへきちゃったから……」

「だって、昨夜あんながたが帰ってきたとき、なにもおっしゃらなかったの？」

「ところが、昨夜は、とても運がよかったんだ。ぼくらのかえるちよつと前に、母が先月ケンタッキーへ注文した種馬が、ちよつと運ばれてきてね、大騒ぎの最中さ。大きくて、——とてもすごい馬だぜ、スカーレット。

——。なにしろここへつれてくる途中、付き添いの馬丁を一噛みやらかすし、ジョーンズボロの駅まで引き取りに行つたうちの黒奴をふたりも踏んづけちまつたんだからね。おまけに、ぼくたちが帰るちよつと前には、厩舎を暴れまわつて、母さんのもとの種馬のストロベリのやつを半殺しにしまったんだ。ぼくらが帰ってみると、母さんは砂糖ぶくろをもつて厩舎の中にはいつて、その荒馬をなだめにかかつていたのだけれど、うちの母

さんは、まったく馬のあやし方はうまいね。黒奴たちは、こわがって、たるきにぶらさがったまま、目ばかり光らせているのに、母さんが、まるで人間にでも話しかけるように話しかけると、馬のやつ、おとなしく母さんの手から砂糖をなめはじめんだからね。馬にかけては、うちの母さんは、まったく第一人者だよ。やがて、母さんは、ぼくらの姿を見ると、『いったい、なんだって帰ってきたんだい、四人もそろって——。エジプトの疫病（むさしび）よりも始末のわるい人たちだよ、ほんとに……』とやりはじめたんだ。すると、いいぐあいに、そのとき、馬のやつめ、急に鼻あらしを吹いて、あと足で立ち上がりかけたもんだから、『出て行っておくれ。この大きなかわいのが気が立っているのがわからないのかい。おまえたちのことは、万事明日の朝だ』ということになっちまったんだ。だから、ぼくたちは、そのまま寝ちまって、今朝は、母さんにつかまらぬうちに逃げてきたってわけさ。あとのとりなし役にボイドをのこしてね」

「ボイドはお母さまに打たれはしないかしら」というのは、彼女もまた、郡内の人々と同じように、小柄なタールトン夫人が、成人したむすこたちをつかまえて宥赦（きよじや）な折檻（せつがん）するというこつて、無関心ではありえなかつ

たからである。打ったほうがよいと考えた場合には、彼女は鞭（むち）で背中を打つことさえあったのだ。

ビアトリス・タールトンは、まったくいそがしい婦人だった。大きな綿花畑と、百人の黒奴と、八人の子どもを管理するばかりでなく、ジョージア州最大の種馬場で経営していた。すぐ興奮する性質で、それに四人のむすこには、ずいぶん手をやいているので、馬や奴隸（どれい）を打つことは、だれにも許さなかったが、むすこたちをときどき折檻（せつがん）することは、べつに害もあるまいと考えていた。

「むろん母さんだってボイドなら打ちはしないよ。あれは長男だし、それに兄弟じゅうで一ばんチビだから、母さんだって遠慮するんだ」と六フィート二インチの身長を誇るスチュアートが言った。「だから、ぼくたちは弁解係に彼を残してきたんだよ。だいたい母さんは、もうぼくたちを打つのはよすべきだね。ぼくたちだってもう十九なんだし、トムなんか二十一にもなっているのに、母さんたら、まるで五つか六つの子どもみたいに扱（あつか）うだからね」

「お母さんは、明日のウィルクス家の園遊会には、その新しくきた馬に乗っていらっしゃるの？」

「母さんは、乗って行きたいらしいんだけど、父さんが、まだあぶないからといってとめているんだ。それに姉妹たちも不賛成なんだ。せめて一度くらいは貴婦人らしく馬車に乗せて行きたいといっているんだよ」

「明日、降らないといいわね」とスカーレットは言った。「この一週間、毎日降っていたんですもの。家のなかの園遊会ほどつまらないものはないわ」

「なあに、明日は晴れるよ、そして六月みたいに暑くなるよ」とスチュアートが言った。「あの夕焼けを見てごらん。あんなに赤いの、ぼくは見たことがないよ。夕焼けでお天気がわかるんだよ」

彼らは、スカーレットの父ジェラルド・オハラが新しく開墾した、はてもなくつづく綿花耕地を越えたかなたの、真紅にいろどられている地平線をながめた。太陽は、いま真紅にたゆとう雲のなかを、フリント川の向こうの丘のかげに沈みつつあった。四月の日の暖かさは、かすかな、おだやかな冷気のうちに消えていった。

その年は、あたたかいいききとした雨をともなあって、春が早くきた。あかい桃の花は急に咲きだすし、やまぐみの花は、暗い沼地や遠い山々を、点々と白い星のように入どった。耕地の耕作はあらかたすんで、血のよう

に赤い夕日が、新しくすぎかえされたジョージアの赤土のあぜをいっそうあかく照らしていた。綿花の種子のまかれるのを待ちのぞんでいる湿潤な飢えきっている畑地の、あぜの一ばん上の砂の多いところは淡紅色に、また畦溝にそって影のおちている側面は、朱や深紅色やえび茶にそまっていた。白煉瓦の屋敷は、荒れくるう真紅の海にうかんでいる島のように見えた。その海は、旋回し、まがりくねり、あるいは彎月状をなして押しよせてくる波濤の淡紅色の波がしらだが、まさにくずれようとするとたんに化石したかのようにであった。というの、このあたりには、中部ジョージア地方のような黄色い粘土の平らな土地や、海岸地方の豊饒な黒土の農場に見られるような、一直線の長いあぜというものがないからだ。傾斜と起伏の多いここ北ジョージアの山麓地方では、豊饒な土壌が川底に流れこむのを防ぐために、曲がりくねったあぜを無数にすきおこしていたのである。

野蠻なほど土の赤い土地であった。雨あがりには血のようになり、ひでりには煉瓦の灰のようになった。しかしそれは世界で最適の綿花栽培地であった。白い家、たがやされた平和な畑地、ゆるやかに流れる黄色くにこった川など、気持ちのよい土地であったが、一方、明るい太

陽の輝きと深い影との、対照のはげしい土地でもあった。きれいに開墾された農園、そして何マイルとなくつづいている綿花畑は、ゆったりと満足して、暖かい陽光にはおえみかけていた。その野の果ては原始林につづいていた。そこは、まっ昼間でも暗く、冷たく、気味わるく、いくら不吉でさえもあった。そして松風の音は、「気をつけろ！ 気をつけろ！ おまえはかつてはおれたちのものだった。またいつかは、もとのようにしてやるぞ」と静かなため息とともに大地をおびやかしながら、その時のくるのを何年も辛抱よく待っているかに思われた。

ポーチにいる三人の耳に、ひずめの音や、馬具の鎖の音がちやがちやいう音や、黒奴の鋭いのんきそうな笑い声などがきこえてきた。野良働きの連中や驟馬どもが農場から引きあげてきたのだ。家のなかからは、スカーレットの母のエレン・オハラが、鍵入れのバスケットをもってきた黒奴の小さな娘を呼ぶ、やさしい声が流れてきた。やがて、かん高い子どもっぽい声が、「へえ、奥さま」と答え、つづいてエレンが裏の煙製所のほうへ歩いてゆく足音がきこえたのは、たぶん野良からもどった人たちに食事をわけあたえるためであらう。こちらの食堂からは、タラ屋敷の召使頭であるポークが、夕食の用事をし

ているらしく、皿や銀器のふれあう音がきこえてきた。この最後の音で、ふたごは、もう帰る時刻だと気がついた。だが、母親と顔を合わせるのがいやだったので、いまにもスカーレットが夕食によんでくれはせぬかと期待して、タラのポーチにぐずぐずしていた。

「ねえ、スカーレット、明日のことなんだけど」とブレントが言った。「ほくらは、この土地から離れていたのだからとって、明晩踊って悪いという理由はないだろう。明晩のダンスの番組、まさか、まだ全部約束済みではないだろうね、どう？」

「ううん、約束済みよ。だって、あなたが帰ってくるなんてこと知らなかったんですもの。あなたたちを待っていて、そのおかげで壁の花になるなんて、いやですものね」

「きみが壁の花になる！」ふたりは騒々しく笑った。

「ねえ、きみ、ぼくには最初のワルツを、スチュアートには最後のワルツを、そして夕食はぼくたちといっしょにする約束してくれないか。またこの前の舞踏会のように、階段に腰かけて、ジンシーばあさんと呼んで、運命占いをしてもらおうじゃないか」

「いや、あたし、ジンシーばあさんの占い、大きらいよ。あなたたちだって知ってるじゃないの、あたしのことを、髪の毛のまつ黒い、そして黒い長い口ひげの紳士と結婚するなんていうんですもの。髪の毛の黒い紳士なんて、あたし、大きらいだわ」

「じゃ、きみ、赤毛が好きなんだね。そうなんだろう」とブレントが、わが意を得たりという笑い顔をした。「さあ、ワルツと夕食の約束をしてくれよ」

「きみが約束してくれば、ぼくたちだって、秘密のことを話してあげるぜ」と、スチュアートが言った。

「どんなこと？」と、スカーレットは、子どものように、さっそくその言葉にとびついた。

「スチュアート、それ、昨日アトランタで聞いたあれかい？ あれなら、だれにも話さないって約束だったじゃないか」

「うん、ピティおばさんから聞いたあの話さ」

「え、どなた？」

「ほら、アシュレ・ウィルクスの親類で、アトランタに住んでいるピティパット・ハミルトンさんさ、知ってるだろう——チャールズ・ハミルトンやメラニー・ハミルトンの叔母さんさ」

「知ってるわ、妙なおばあさん、あんな変ちくりなおばあさん、あたし見たこともないわ」

「まったくね。ぼくたちが昨日アトランタで汽車を待つてると、ちょうどあの人が馬車で通りかかったのさ。そこで馬をとめて、ぼくらとちょっと話したんだが、そのとき、明晩のウィルクス家の舞踏会で婚約の発表があるはずだともらしてくれたんだよ」

「ああ、そのことなら知っててよ」とスカーレットは、つまらなそうに言った。「あのひとの甥の、あの頭のすこしたりないチャールズ・ハミルトンとハネー・ウィルクスのことでしょう。チャールズのほうは、あんまり気がすんでいないらしいけど、あのふたりが、いつかは結婚するということは、何年も前からだれでも知っていることよ」

「ほんとうにきみはチャールズを低能だと思っているのかい」とブレントが言った。「だって、去年のクリスマスのあるころには、さかんにきみのまわりにへばりつかせていたじゃないか」

「へばりつくのは向こうの勝手よ」スカーレットはちょっと肩をすくめてみせた。「まるで女みたいな男だと思うわ」

「ところが、こんど発表されるといふのは、チャールズの婚約のことじゃないんだよ」とスチュアートは得意そうにいった。「アシユレとね、チャールズの妹のメラニーとの婚約のことなんだ」

スカレットは、顔色は変わらなかったが、くちびるは白くなつていった。——ちやうど、警告もなしに致命的な一撃をくらった人が、その衝撃をうけた瞬間には、しばらく何事が起こったかわからないのと同じだった。スチュアートをみつめているスカレットの顔が、あまり静かだったので、他人の心をよむことできぬ彼は、当然、彼女はただ驚いて興味をひかれただけなのだと解釈した。

「ピティおばさんがいうには、メラニーの健康が思わしくないの、来年まで発表はしたくないのだが、戦争の話があまりやかましくなったので、いっそのこと早く結婚させたほうがいいだろうと両家のあいだで話がきまつたのだそうだよ。それで明晩の食事のやすみのときに発表するのだそうだ。さあ、スカレット、ほくたちも秘密を話してあげたんだから、きみもほくたちといっしょに食事をするとか約束したまえよ」

「もちろん、お約束するわ」とスカレットは、機械的

に言った。

「そして、ワルツを全部ね？」

「ええ、全部」

「すごいぞ！ きっと、ほかの連中が嫉いて（あやう）気持ちがいたいになるぜ」

「気持ちがいいみたいにさせとけばいいさ」とブレントが言った。

「ほくたち二人で始末してしまふよ。ね、スカレット、朝の園遊会でも、ほくたちといっしょの席についてくれないか」

「え、なあに？」

スチュアートが、もう一度同じことをくりかえした。

「もちろんよ」

兄弟は、よろこびの、だがいくらかは驚きの顔を見あわせた。ふたりとも彼女が自分たちに好意をもっているとうぬぼれてはいたが、いままで、こんなにたやすくその好意のしるしを得たことはなかったのだ。いつもは、ごきげんとりとり頼んでも、うんともいやともいわず、ふくれるとおもしろがつて笑うし、おこるとつんと冷淡になるし、さんさん手こずらせるのが常だったのである。それなのに、いまは、——園遊会のためにはいっしょの